

壺棺再葬墓の基礎的研究

設 楽 博 己

はじめに

- 1 概念規定と用語の整理
- 2 時期区分と分布の変動

3 再葬のプロセス

- 4 再葬の原理
- おわりに

論文要旨

民族・民俗学で複葬と呼ぶ葬法は遺体を何度も故意に取り扱うため、葬儀が複数回におよぶもので、考古学ではこれを一般的に再葬と呼んでいる。日本列島では縄文晩期終末から弥生Ⅲ期までの東日本的一部分で、主に壺形土器を蔵骨器にした再葬墓が発達した。この再葬墓に特徴的なものは、一つの土坑の中に複数の土器を納めた複棺再葬墓であるが、複数の土器棺に納めた人骨が複数体の場合は、一括埋納の契機や合葬された人々の社会的関係が問題になってくる。

複棺再葬墓の土器には摩滅状態の著しいものや補修痕のあるものが日常集落以上に含まれる。また、一土坑の複数の土器には型式差のあるものが共存し、埋納までに要した長い集積の期間を推測させるものもあるが、それはまれである。一土坑の遺体数は2～4体で7体という例もみられる。これら合葬人骨は男女ともにあり、また成人と小児など世代を超えたものが組み合わさる場合もある。

したがって一土坑における複数の納骨土器は、ある期間の集積を経て一括埋納されたものであり、集積の期間はまれに長期にわたる場合もあるが、多くは土器型式の存続期間を超えるほど長くなかったとみられる。ならば、この一土坑に合葬された者の紐帶は累世的なものは考えにくく、血縁的紐帶か世帯のまとまりか世代によるまとまりかということになる。出土人骨におもきを置けば年齢階梯的つながりは想定しがたく、血縁か世帯であろうが、これを解くてがかりは墓域の構成にある。

初期の再葬墓群は弧状を呈するものがある。福島県根古屋遺跡の分析からすると、弧状の墓域がいくつかの群に分かれており、各群に新古の墓坑がみられる。これはあらかじめ墓域を区画して埋葬していくたるものであり、これら各群は縄文時代の埋葬小群と同様なものだといえる。縄文時代の埋葬小群は血縁のつながりがある身内のグループと、非血縁の婚入者のグループからなる一つの世帯の累積的墓群とされる。縄文時代後・晩期には夫婦など血縁関係にないものどうしの合葬はおこなわなかったとされる。複棺再葬を合葬の一形態とみなし、そこに縄文時代の合葬原理が生きているとすれば、こうした縄文時代の墓域構成を踏襲した初期の複棺再葬墓は、なんらかの血縁的な関係にある者どうしを合葬した土坑と考えるのが妥当だろう。そしてそれらが集合した埋葬小群が、一つの世帯の歴史的な墓群であり、墓域全体が一つの集落の墓地だと考える。